

研究概要報告書

(/)

研究題目	民俗音楽の楽器音と口唱歌の関係についてのデータベース作成	報告書作成者	黒崎岳大
研究従事者	黒崎岳大		
研究目的	<p>日本の民俗音楽(民謡)では、音象徴に基づく表音語や表容語にとって、楽器音やその楽器の奏法を指示する口唱歌が日本独自のかたちで発達を遂げてきた。本研究の目的は、各地に口承で伝えられている民俗音楽の楽器音に関する口唱歌のデータベースを作成することであった。</p> <p>日本独自に発達してきた口唱歌の研究は、雅楽の旋律管楽器や能管の唱歌詞を対象に、主に近世文学や演劇の分野で検討がなされてきた。1960年代以降、民俗音楽の立場から口唱歌の理論的な考察が行われるようになる。吉川英史による三味線と箏の口唱歌についての変遷と機能についての考察や、小泉文夫による雅楽に使われる管楽器や弦楽器の口唱歌をアイルランドやインドネシアの民俗音楽の事例と比較した研究は、その先駆的な研究であるといえる。一方、川田順造はアフリカ・モシ社会(ブルキナ・ファソ)における口頭伝承分析に、言語音の音素分析を用いた。本件研究者も、川田の研究に強く影響を与えたアメリカ民俗学のパフォーマンス研究における理論検討を行ってきた。ゆえに、本研究は民俗音楽における口唱歌のデータを言語音の音素分析に基づいて調査分類することで、近世及び近代の芸能の系譜及び伝承課程のプロセスを明らかにしていく上で有効な基礎的研究として位置づけている。</p> <p>平成14年度の調査研究では明治時代以降群馬県の各地で継承されてきた民謡・八木節における太鼓・笛・鉦・鼓の口唱歌をその楽器音と共にデータベース化し、それを利用して現在群馬県内各地に独自の形で伝わっている八木節のバリエーションをマッピングし、八木節の成立に影響を与えた「前八木節」と呼ばれる民謡との関係を口唱歌の面から明らかにすることであった。</p>		

研究概要報告書

(/)

研究内容

(本研究は、平成12年度より先行研究の整理及び現地調査に向けた予備調査を開始した。13年度は、14年度に行うデータ収集対象地域を確定するための現地調査を行った。その結果群馬県前橋市や高崎市、桐生市等の調査対象地域及び保存団体を選定し、各地域の首長・行政からの調査協力及び各地域の八木節保存団体により本研究への積極的な参加の確約を得た。)

平成14年4月から平成15年2月にかけて、週末及び夏季長期休暇を利用して、説明書に記載した各地域の八木節保存団体の練習現場に赴き、太鼓・笛・鉦・鼓の音声をMIDI情報として保存し、練習現場において継承されている口唱歌を音声データとしてパソコンに取り込んだ。特に8月20日から10日間、吾妻郡(吾妻町、長野原町、草津町、六合村)にて八木節及び前八木節と考えられる民謡(四つ足・八つ足踊り、鳥追い踊り等)の音声収集及び継承者へのインタビューを目的としたフィールド調査を行った。

パソコンに取り込んだ口唱歌の音声データを、群馬県内で行われている四区分法(中毛・東毛・西毛・北毛)を基に分類し、それぞれの地域で典型的と思われる八木節の事例を選定した(以後、選定された事例を「地域の典型例」と呼ぶ)。さらに、「地域の典型例」の周辺に位置するも、楽器音やリズムが極めて異なっている事例を「例外」として選定した。これらの事例を及びそれに関する口唱歌の音声データは、SUGI Speech Analyzerを利用して、音声波長・ピッチ・音圧・フォルマント軌跡を表示させた。さらにそのデータに対して、スペクトル分析・ピッチ曲線比較・広フォルマント分析を行った。(平成14年11月から15年3月にかけて分析)

の結果と対応する楽器音のデータを群馬県内地図上にマッピングし、採取した八木節及び前八木節で使われる口唱歌と現在の八木節で使われている口唱歌を比較した。この分析を基に八木節の系譜について分析・考察を行い、日本民俗学会年会及び学会誌(『群馬歴史民俗』)にて成果発表を行なった。

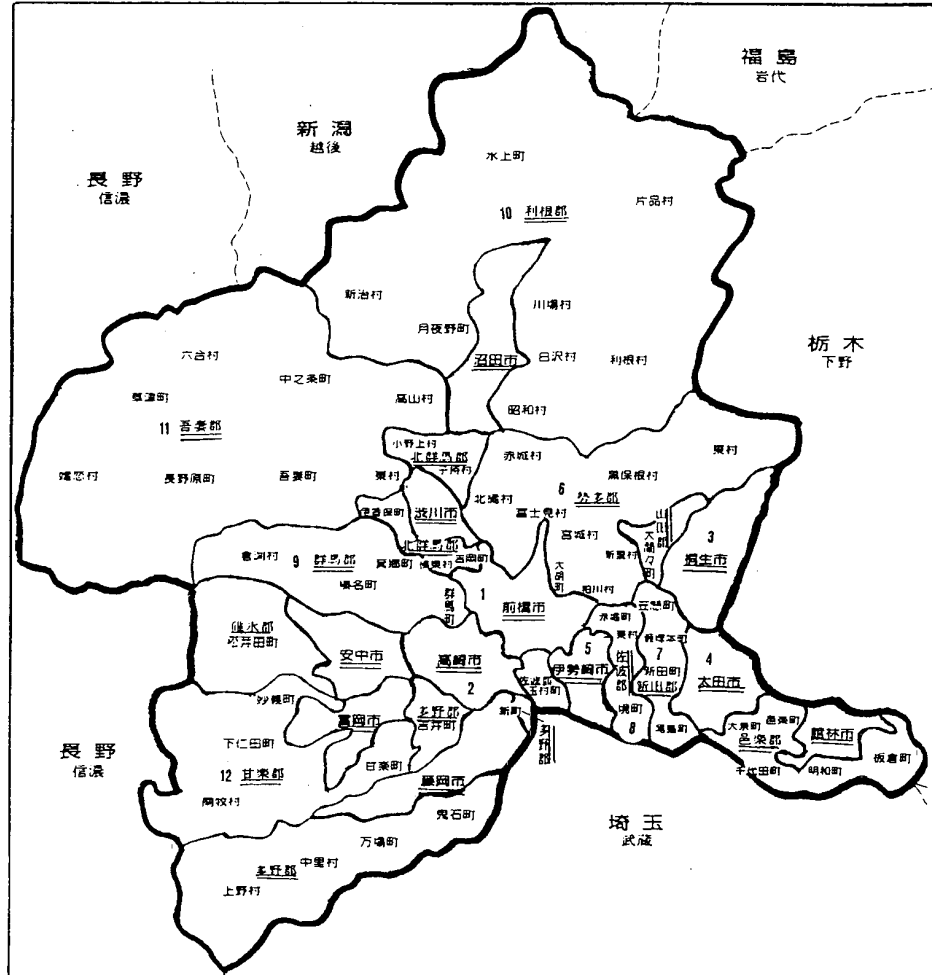
研究概要報告書

(/)

<p>研究のポイント</p>	<p>本研究は、近世から近代にかけて当該地域に広まった民謡・八木節の系譜を遡るための有効な方法を提示することになり、近世及び近代の芸能史研究において、民俗音楽の立場から考察を行なうという新たな側面からのアプローチを行なったことにある。従来の研究では、芸能史の研究は古文書等の文書資料の検討が中心であった。わずかに現在継承されている民俗音楽・民俗芸能に対してフィールド調査を行なうことはあったが、文書資料研究の補完的役割を果たすに過ぎなかった。本研究は民俗音楽の継承という一方で継承者によって変化していくことを前提としつつも、他方その奏法などは地域共同体内で厳格に守られている、興味深い特徴を利用して、民俗音楽の伝播という課題を捉えるのに有効な方法であると考えている。</p> <p>また本研究はインフォーマントへの聞き取り調査が必須となるが、こうした情報に詳しいインフォーマントの多くは高齢に達し、彼らの貴重な記憶を後世に残すという意味でも意義深い研究といえる。</p>
<p>研究結果</p>	<p>本研究を通じて以下のことが明らかになった。</p> <p>前八木節が発達していく過程で、新潟方面から伝播経路について北毛地域からの系譜と西毛地域からの系譜の両説が存在したが、音声分析による結果からは善処の可能性が高いことがわかった。</p> <p>明治時代以降、八木節に直接影響を与えたと考えられる「木崎音頭」に関して、現在継承されている音頭は昭和初期以降に新たに作られたものであり、むしろ現在の木崎音頭の方が、リズムや音調などで八木節からの影響を強く受けている。</p> <p>1970年代以降急激に台頭した桐生市の八木節は、周辺地域である東毛地区の市町村はもちろん、前橋市や足利市にまで影響を強めている。しかしながら隣接する太田市の八木節は一部地域を除いて、桐生市の八木節の浸透を拒絶している傾向が確認される。</p> <p>なおこれらの結果については、学会発表及び学会誌への掲載の中で従来の芸能史と比較させて検討している。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>本研究は限られた期間内で一定の成果を挙げるために、群馬県地方の八木節の継承に絞って検討してきた。しかしながら、八木節の分布は栃木県南部や埼玉県北東部にもみられる。こうした地域への伝播についてもさらに検討をしていく必要があると思われる。</p> <p>一方で、民俗音楽に対して言語の音素分析を用いた方法の有効性について、一定の成果は上がったと考えられる。さらにこの方法を民俗音楽にまで応用することも可能であると思われる。具体的には、本件研究者が現在調査を行なっているマーシャル諸島共和国にて、当地に伝わる民族音楽に対して各環礁及び島ごとのバリエーションを把握すると同時に、そのデータを本研究のアプローチで分析することによって、近代以前における太平洋島嶼地域での文化や情報の移動について新たな考察が示すことができると期待される。</p>

説明書

群馬県内八木節調査対象地域一覽



<平成14年度までの調査と調査対象団体選定の手続き概要>

- 平成12年4月 八木節の現状についての民俗調査を開始。群馬県内の八木節についての先行研究や歴史資料に関する文献調査を行なった。
- 平成12年7月 文献調査に基づき選定した八木節保存団体（前橋市芳楽会・桐生市八木節民謡会・伊勢崎上州八木節会）に対して予備調査を行い、文献調査の結果と比較した。
- 平成13年1月 岩手県遠野市の語り部の言語分析を実施した。この研究を通じて、各八木節保存団体に伝わる口唱歌と楽器音の関係についてのデータベース作りを計画した。（楽器音と口唱歌の関係を探る本研究の事実上の開始）
- 平成13年4月 群馬県内に保存されている口唱歌に関する文献調査。
- 平成13年5月 文献調査をもとに地域的分布や歴史的背景を踏まえて、50ヶ所の調査地及び調査保存団体を選定。そこから下記の選定条件に合致する30余の調査対象地及び保存団体を決定。
- 平成13年7月 選定した調査地及び団体の本調査を順次開始する。調査では保存団体の現状（活動状況・使用される楽器・継承由来等）について聞き取り調査を行い、同時に使用される楽器の演奏とそれに関する口唱歌についての音声情報を録音・録画した。

☆調査地及び調査保存団体の選定条件（以下の条件に適する対象地及び保存団体に決定した。）

- ① 周辺地域の八木節とは異なる、独自の形態を継承している団体であること。
- ② 定期的に八木節の継承活動（練習）が盛んに行なわれていること。ただし、団体メンバーの高齢化が進み、継承活動が危機的な状況を迎えている団体は優先的に調査を行なう。
- ③ 文献資料に基づき八木節の成立に影響を与えた「前八木節」と呼ばれる芸能が継承されている、もしくはそれらの芸能の影響を強く受けた八木節が保存されていること。
- ④ 調査に際して、保存団体及び行政等の協力を得られること。少なくとも調査に支障をきたすような問題が起き難いこと。
- ⑤ 該当する八木節保存団体に関する文献資料が比較的多く残されていること。

（構成図、ブロック図、フローチャート、データ表、グラフ、写真など研究内容の補足説明にご使用下さい）